

# 収蔵史料紹介

史料部歴史資料室は、資料の調査・収集・整理・研究・保存及び活用を基本業務としており、我が県に関係する古文書を中心とした史料の寄贈・寄託による受け入れや購入、マイクロカメラ撮影による写真版の作成などを行っております。

これまで当館が受け入れ公開している史料については、受け入れ単位(家、または史料群)ごとに簡単な解説を加えて、順次、『史料利用の手引き』という史料群ごとの解説書(当館ホームページにある「資料検索」で閲覧可能)に加えておりますが、今回はその中から最近受け入れた史料群について紹介したいと思います。

## 江幡進家文書



東茨城郡茨城町駒場の江幡家に伝えられた文書、8点。江幡家は戦国期江戸氏の家臣と伝える家で、江戸氏没落後、現在地へ土着したと伝える。うち1点は戦国末期、江戸氏当主江戸重通から江畑治部小輔への官途状。また1点は近世初頭、千葉氏末裔千葉京(景力)胤から江端雅楽助への官途状である。他に、由緒書、系譜類が存在する。

## 立原家文書

水戸藩士・儒学者・彰考館総裁であった立原翠軒の後裔立原家に伝えられた文書、112点。立原翠軒(甚五郎、杏所(甚太郎)の授受文書が中心である。とくに水戸藩地理学者長久保赤水からの翠軒宛て書状に見るべきものが多く、大日本史地理誌編の編纂内容や方向についての質問や、赤水の身の動向が判明する。また、翠軒の学問形成過程を窺わせる覚書や、杏所模写になる林子平の「三国通覧図説」掲載の「琉球三省并三十六嶋之図」が存在する。



## 須田家(横浜市)文書



潮来市(旧牛堀町)牛堀に代々居住した須田家に伝えられた文書266件1198点(須田氏は現在は横浜市に居住)。国文学研究資料館所蔵須田家文書(3005点。当館でも写真版で公開済)と当館所蔵須田家文書(1512点、原本。この他、和書目録、漢籍目録にも須田家蔵和書・漢籍類200点がある)は、天保15年に当須田家から分家した言わば須田分家文書で、当文書群は須田本家文書というべきものである。牛堀村は水戸藩領で、須田家は代々牛堀村庄屋と隣村である永山村の兼帯庄屋を勤めた。また、大山守にも一時期就任している。幕末水戸藩の抗争の中で、須田本家は

諸生派に属し、須田分家は天狗派に属した。

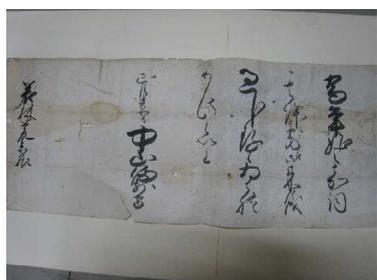
本文書群の大きな特徴として、巻物に仕立てられた状物が多数残されていることがあげられる。寛永期を初発とする割付・受取類や霞ヶ浦の漁場関係文書など、巻物に仕立てられた古書は多岐にわたる。また、須田氏秘録(記)と題された冊子も触や願書類、由緒などを丹念に書き写した膨大な古記録である。これらは、天保期前後の当主源之丞為則(喜源治)とその子源之丞為章(茂十郎)の手になるものと思われるが、分家を創設する一方、「家」というものを強烈に意識する中でこのような文書保存思想を覚醒し、幕末から明治という須田家にとって苦難の時期を乗り越え、現代に伝えられた貴重な文書群といえる。

### 飯田昌夫家教育資料

つくば市北条の飯田家に保存されていた、沼崎尋常小学校、沼崎尋常高等小学校、旭国民学校関係の教育資料 19 点(親番号)。飯田庸之助氏が昭和 21 年より旭国民学校長を務めた関係で当該資料が同家に保存されていたものと思われる。資料中、「御真影奉安殿設計図」や、奉安殿の管理日誌である「奉護日誌」は、戦後全国的に廃棄された場合が多い中で残った貴重な資料といえる。また「旭村郷土誌」、「我が旭村」は大正期の旭村の村勢を知る好資料である。



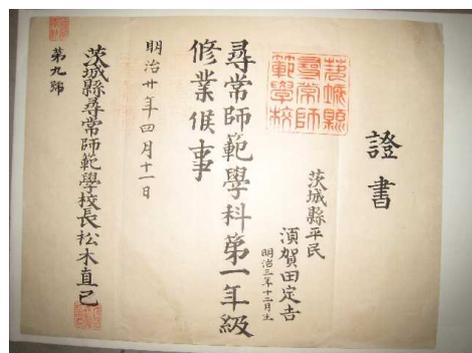
### 大川家収集資料



水戸市在住の大川家で収集された、江戸末期から昭和初期にかけての資料 45 点。「白縫譚(しらぬいものがたり)」などのいわゆる草双紙といわれる版本 9 点、和歌短冊 17 点が含まれる。元治元年の「(岩舟山集会の弘道館諸生による建言書写)」,昭和 16 年に水戸殉難志士恩光碑保存会が編集した『水戸藩国難事件殉難者名簿』,明治 35 年に常総新聞の瀧興治が著した『常陸の海水浴』の資料などは特筆されよう。

### 石井定輔家資料

本文書群は、石井家に伝わる石井(旧姓須加田)定吉氏の「証書〔尋常師範学科第一年級修業〕」など師範学校修了に関するもの、「(茨城県訓導任命状)」など教員としての辞令、また訓導や校長としての「(月俸給与俸給辞令)」などを主に含む 83 点の資料である。石井定吉氏は明治 21 年に師範学校を終え、新治第二高等小学校を振り出しに複数の学校を歴任し、その間茨城県立図書館巡回書庫開設事務にも携わるなど教育各方面にわたり活躍した。教育者の人事記録として、教育史研究にとって大変貴重な資料であり、歴史的価値が高い。



## 根本四郎氏収集日中戦争関係写真資料



当該資料は、寄贈者記井喜代江氏の父根本四郎氏が収集した写真群である。根本四郎氏は東海村出身、大正7年1月21日生まれ、平成5年74歳で亡くなっている。昭和15年に土橋部隊に入隊し、中国へ出征（資料19「昭和15年9月より11月まで11号作戦」）、通信の仕事に携わるも、移動中に抗日部隊に狙撃され左腕に重傷を負う。上海の病院に入った後、箱根の病院に移り療養したという。写真群もそれら

の経歴に関わって収集されたものである。

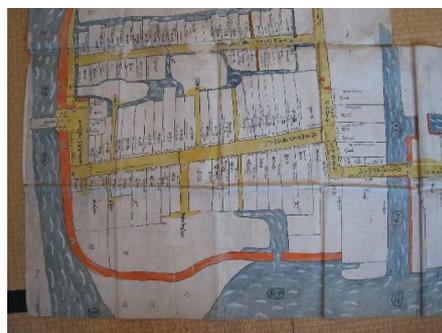
資料の内容を大別すると、1つは「臨時東京第陸軍病院長原田豊閣下」「(皇族病院慰問写真)」など根本四郎氏の療養に関わる写真群。1つは「西湖」「上海黄浦灘」など日本軍が進行した杭州西湖や上海の風景写真群。1つは日本軍の行軍や攻撃の様子を伝える写真群であり、そのほか昭和天皇の靖国神社参拝時の写真や東京駅などの写真がある。

日中戦争当時の様子を伝える写真が民間にあることは稀であり、また戦後60年以上が経ち残存する当時の資料は限られてきていることを考えると、歴史的価値のある資料である。特に写真中「水戸市大町慰問団」などの写真は本県から杭州へ慰問に行った際の写真であり、本県関連の庶民資料としても貴重である。

## 石塚家(土浦市中央)文書

土浦市中央(旧中城町)の石塚家に伝来した史料20点の写真版。

石塚家は、水戸街道沿いの旧中城町西側屋敷に代々居住し、屋号「笹屋」、通り名を七郎兵衛といった。石塚家が土浦へ移住した時期は正徳元年とされ、もとは宇都宮周辺に居住していたとの伝承がある。のちに質屋として土浦町の質物仲間に名を連ねるが、詳細は不明ながら当初は人形細工を生業としていた



ことが、現在も伝わる古びた人形が彷彿とさせてくれる。また、荒物渡世にも従事していたようで、幕末期には土浦藩の御用商人に列せられている。[表]「御奥 御用達」、[裏]「荒物渡世 中城町 笹屋七郎兵衛」と記された鑑札が現在も伝わっている。その他、看板にかぶせたものではないかと思われる「銭御用」と記された網状の袋は、両替商的な業態も行っていたことを想像させてくれる。

撮影した20点の史料は、主に土浦町(特に石塚家が居住した中城町)に関する史料(6-4～7-4「扣帳」、8-5「万控帳」は石塚家の経営帳簿と雑記帳的な史料)である。石塚家自体は、御用商人にはなっているが町名主や町年寄には一度も就任したことがない。従って、町方史料は本来伝来しないはずであるが、撮影した20点のうちの町方史料は、質屋を営んでいたことで、旧町役人(石塚家とは親戚であった町年寄を勤めた中村治助とされる)から質にとったものが質流れとなり、石塚家に伝来したものらしい。このうち、1-1、2-1、3-1

の「(万付留帳)」は、元禄 16 年から正徳 2 年にかけての町方御用記録である。同時期の土浦町に関する町方御用記録としては、土浦市立博物館蔵・内田家文書の「御用日記」があるが、「御用日記」は内田家が居住・町年寄を勤めた東崎町のもので、「(万付留帳)」は中城町に関する御用記録である。内容的にも、「御用日記」以上に店借の人別移動や巡検使通行の際の馳走の様子、屋敷・田畑売買証文や争論の願書など多岐にわたっており貴重である。

また、4-2-1「御運上願江戸土浦附留帳」は、安永期の幕府による河岸改の際、惣代が江戸へ出府して幕府役人と交渉した記録をまとめたものである。河岸運上の新たな負担をとともなう幕府の河岸改に際し、土浦町の商人がどのような姿勢で臨んだのか、交渉を陰で操っていた土浦藩の意向とあわせ興味深い。

12-14 ~ 20 は、宝永期・元文期・安政期の中城町の彩色の絵図で、13-21 ~ 27 はその全体図である(枝番号の最終番号は 27 であるが、12-24 ~ 20 の全体図であるため、史料の点数としては 20 点とした)。絵図にはいずれも、地主名から表間口・裏行の間数、道幅、木戸や番所などの建物も描かれており、町屋敷の時代的な推移を分析する上でも史料的価値は高い。なお、元文期の絵図には町屋敷区画上に重ねて付箋が貼られた箇所が何箇所もあり、屋敷の売買により地主や表間口(集積と分割)の変化が頻繁にあったことがわかる。

### 小野崎家文書

久慈郡長谷村(現常陸太田市)の天台宗修験本山派密蔵院の住職を勤めた小野崎家に伝えられた文書、530 件 531 点。長谷密蔵院関係の書状が中心で、天正 17 年(1589)から昭和 59 年(1984)にかけての文書がある。長谷密蔵院は京都の聖護院より山伏大先達二十八人の一員となったが、この補任は徳川光圀が求めて実現させたものであった。この時、光圀は久慈・多賀・那珂三郡の支配を密蔵院に対して命じている。天正 17 年(1589)の豊臣秀吉から聖護院に宛てた書状(写)、嘉永 7 年(1854)の聖護院の法眼秀孝・秀賀が久慈郡川合村主計坊教秀に宛てた僧都御免之事、密蔵院朱印状書上などの史料がある。

